

目次

◇ 蒼そうのページ

詩

らむね

.....

1

詩

恋とラムネ

.....

2

小説

鳥

.....

4

◇ 澗れい音いんのページ

小説

┌

└

.....

8

あとがき

◇卒業生特別寄稿 マナ（2014年3月卒業）

詩 とても幼稚な

詩 闘う日々

小説 まやかし堂

小説 小さな世界にさよならを

.....

26

.....

28

.....

30

.....

34

蒼のページ

らむね

びーだまころころしゅわしゅわと

甘い甘い液体

口の中しゅわしゅわじゅ

びーだまころころしゅわしゅわと

一緒に半分こなんだか少し甘酸っぱいね

びーだまころころしゅわしゅわと

中身は空っぽ淡い空色

空に掲げて溶けていく

恋とラムネ

口の中ころがして

ゆっくりゆっくり溶かしてく

じれったくなつて嚙かんじやつて

甘酸っぱい味が口の中広がっていく

もう少し欲しくなつちやつて

欲しがりになつちやつて

もう一個口の中に放り込む

ゆっくりゆっくり時間をかけて

ゆっくりゆっくり溶かしてく

食べてるのがばれちゃって

そのままゴックン飲み込んで

「食べてないよ」なんて嘘うそついて

どんどん罪を重ねてく

後ろでからんと音立てて

最後の秘密を隠してく

昔から空を飛んでみたかった。自由に空を泳ぐ鳥がうらやましかった。

幼稚園の頃の夢は鳥になることだった。それほど鳥に憧れていた。そんな高校生になった僕の今の夢はパイロットになることだった。さすがに鳥になることは諦めた。諦めたというより気付いてしまった。僕が「人間」である以上「鳥」にはなれないのだと。それを知った僕は絶望した。しかし、すぐに空に近い所で働ける職を探した。そこでいちばん最初に思いついたのがパイロットだった。僕はパイロットになるために猛勉強した。そして、志望した大学では模試でA判定を取り、無事大学に入学した。そこから事はトントン拍子で進んで行き、ついに念願のパイロットになり今、空を飛んでいる。僕の人生は幸せです。これ以上に望む事はありません。

——なんて、人生そう上手く行くはずもなく、パイロットになりたい僕は猛勉強したが、志望した大学ではE判定をとり、受かる見込みなどなかった。しかし、諦めず勉強を続けた。朝昼晩時間を見つけては勉強し、寝る間も惜しみ勉強した。毎日毎日勉強漬けの日々を送った。そして次に模試で取った判定はE判定。何も変わらなかった。何一つとして変わらなかった。僕は、疲れてしまった。勉強する毎日が、親や教師に他のものになれと言われる毎日が、友達とも呼べぬ同級生に馬鹿にされる毎日が、何一つとして変わらなかったと自覚した今、全部が降り注いで来た。吐き気を感じた。耐え切れなくなつてトイレで吐いた。胃の中の者と頑張つて来た毎日の努力とが全部外に出て行ってしまったかのように感じられた。脱力した。明日からまた努力して

勉強が出来る気がしなかった。

僕はおもむろに立ち上がり、駆け出した。一番のお気に入りの場所を目指して駆けた。空が一番近く感じられるあの場所へ。

僕のお気に入りのそこは、いつものごとく人が一人も居なかった。空を見上げると、憎たらしい程の晴天だった。僕は空に飛び立つようにして落ちた。風が頬に当たって気持ち良い。今、手を上下に動かすと飛んで行ける気がした。僕は手を広げ風を感じた。鳥になった気分だった。涙が出てきた。これはきつと嬉し涙だ。長年の夢だった、鳥になれて最後は終わるのだから。僕は今まで生きてきた中で一番の笑顔を作り、落ちていった。

◆読者のみなさんへ

この度は『櫻』の春号を手に取っていただきありがとうございます。この度部長になりました「蒼」と申します。まだまだ未熟者ですが応援のほどよろしく願います。

さて、今回書いた詩は「らむね」と「恋とラムネ」です。「らむね」は夏の青春を思い描きました。男女が付き合っていない頃、夏のある日、駄菓子屋でらむねを買い、二人で飲み分けるといふ内容です。

「恋とラムネ」は一見普通のラムネ菓子を食べる話ですが、この詩の中には裏の意味があります。その裏の意味とは、浮気です。一行く四行のところは一人目の男の人との恋、五行目く九行目までが二人目の男の人を落とそうとしているところ、十行目く十三行目まではそれがバレて言い訳しているところ、十四行目、十五行目では三人目の男の人の存在を暗示しています。

同じ「dame」でも、「らむね」と「ラムネ」とすることでもまったく違うものとなりました。こう考えると、表現を違うものにすればいろいろな話を書けるんだなと思いました。それが詩や小説のいいところだと思います。

零音のページ



王国歴史書第二巻 六章 三七九ページより

…古くから我が国は地形、天候、軍事力、魔術、すべてにおいて恵まれ数百年もの間平和を保ってきた。もつとも我が国の平和は王家がいなければ成立しなかっただろう。

王家には国全体を包む結界を張る力が代々受け継がれてきた、この結界の力で魔物や敵軍でさえも我が国に近寄らなかつた。

しかし、そんな平和は一瞬にして崩壊した、国王と王妃の突然の死によって結界が弱まったせいであった。王家に唯一残された幼いフィアンティーヌ王女の力によって結界が壊れることはなかつた。それから月日が流れ、フィアンティーヌ王女の五歳の誕生日。

…王女は突然姿を消した。

王女の失踪によって弱まっていた結界は音もなく破壊し、その瞬間、敵はこの時を待ちわびていたかのよう
に我が国へ攻め入ってきた。

これまでにないほどの大きな戦いだったが、我が国が誇る王国騎士団の力によって兵士の犠牲は出たものの
民達からは一人も犠牲は出なかつた。

今では結界が変わって騎士団が国を守り、学生を中心とした小隊、いわば騎士団の見習いである「青年隊」
もでき、我が国は平和を取り戻しつつあつた…。

今から七年前、国立孤児院にて。

「如月夜美……」

ドア越しに聞こえてくる声に夜美はくっつけていた耳をドアから話した。聞き覚えのない男性の声が自分の名前を言ったことにどこからか恐怖にも不安にもたとえようのない感情が襲ってきた。それでも好奇心からか夜美は再びドアに耳をくっつけて向こうの声を聴いた。さっき自分の名前を言っていた男性の声と一緒にこの施設の院長の声も聞こえてくる。

「……半年前に来た子でして、人見知りのせいかあまりしゃべらない大人しい性格です」

「……この子の親は？」

「本人が言うには『殺された』と、ですが不思議なことにここ半年の間に殺人などの襲撃事件は一件も起こってないんです……。おそらくですが親の死がショック過ぎて記憶が曖昧になったとしか……。」

「……そうなんです。わかりました。」

会話が止むと足音がドアの方にどんどん近づいてきた。夜美がドアから大きく離れると、

「……入りなさい。」

ドアがゆっくり開き、院長が冷たく言った。さっきまでの会話を聞いていた夜美はいつも以上に緊張しながら部屋に入ってしまった。

中には黒髪で二十代くらいの若い男性が椅子に座っていた。

「こんにちは、如月夜美ちゃん。僕の名前は朔並平助、王国騎士団で軍医をしているんだ。……君のお父さんになりたいのだけど……いいかな？」

平助の優しい声と笑顔を見て夜美も悪い人だとは思わず、この人が自分のお父さんになってくれることに少し嬉しさを感じた。

「……こ、こちらこそ……よ、よろしくおねがいします。」

夜美のぎこちないあいさつに平助はありがとう、と言うとにつこり笑った。

平助は夜美と同じ施設にいた夜美より三歳年上の青年、葉月永遠はづきとわを引き取ると、平助、永遠、夜美の三人で仲良く平穏な日々を過ごした。

それから七年の時が過ぎ、平助の影響もあつてか、十二歳で青年隊に入隊した永遠は、十七歳になった今では青年隊のリーダーを務めていた。一方、十四歳になった夜美は今日、通っている国立学園の中等科二年生として新学期を迎えようとしていた。

国立学園にて。

新しい教室の席に座り、夜美はすることもなくただじっとしていた。教室は騒がしいが、夜美の座ってる教室に一つしかない三人席の左隣の人は机に顔を伏せ、右隣の人は読書をしていたので夜美の周りだけは静かだった。しばらくしてスーツをビシッと着た若い女性が教卓に立った。それと同時に騒がしかった教室も自然と静かになった。

「みなさん、おはようございます。今日からこのクラスの担任になる文月雪華ふづきせつかです。この学校に新しく新任教師としてやってきました。宜しくお願います。」

雪華の挨拶に生徒たちも元気な挨拶で返す。

「さあ、皆さん。早速ですが隣に座っている人に自己紹介をしてみましよう！一年生の時から顔見知りだったかもしれないませんが、新学期なので改めてしてみましよう。」

少し不満を吐く人もいたが、席の隣同士でそれぞれが自己紹介を始めた、夜美の隣にいる二人もいつの間にか顔を挙げていた。

「……レオン。長月ながつきレオンだ、……よろしく。」

夜美の右隣にいたくせ毛の青年は面倒くさそうに自己紹介を済ませると顔を伏せて縮こまっていた時とは逆に大きく伸びをした。

「で、お前らは？」

あくび交じりに質問するレオンに夜美は小さく肩をビクツとさせ口を開けた

「あ、えっと、如月夜美です。……よろしくお願いします。」

夜美に続いてもう一人のメガネをかけた青年も口を開ける。

「神在かみありゆうま祐真ゆうまです。よろしくね……。」

三人の自己紹介が終わるとレオンは改めてよろしく、と二人に言った。

「こちらこそよろしく、長月くん。」

夜美のあいさつにレオンは不機嫌な顔をした。

「……苗字みょうじで呼ばれるの嫌いなんだよ、だから俺のことはレオンって呼んでくれ。その代わりにお前らのことも下の名前で呼ぶぞ、夜美、祐真」

祐真が驚いた表情を見せたのとは裏腹に夜美はにっこりと笑顔をみせた。

「ふふっ、……じゃあ、私も二人のこと下の名前で呼ぶね！レオンくん、祐真くん！」

夜美がそう言ったのを見たレオンは雄真に期待のまなざしを送る。視線に気付いた祐真は驚いた表情のまま口

を開いた。

「……よろしく、レオンくん、如月さん。」

「……私は苗字なんだ……。」

夜美は少しがっかりした顔をした。

「あっ、べ、別に、名前で呼ぶのが嫌だってわけじゃないよ！……。ただ、僕、あまり女の子と話したことなくって、まだ慣れてないだけで……。だから、慣れてきたらきつと如月さんのことも名前で呼ぶから！」

祐真は慌てて途切れ途切れではあるものの必死に弁解した。それを見てレオンはくすくすと笑った。どうして笑うの！？と言う祐真になんとなく面白かったから、とレオンは言いながら雪華が自己紹介をやめるように指示するまで笑い続けた。

……新学期の初日はホームルームだけを済ませると午前中には帰らされ、夜美も足早に学校を後にした。家の玄関扉を開けただいま、と呟いた。普段この時間なら誰もいないがこの日は違った。平助がおかえり、と出迎えてくれた。

「おかえり、夜美。今日は帰りが早かったんだね」

いつもなら出かけている平助がいることに夜美は驚いた。

「た、ただいま。……。平助お父様、今日はどうして家にいるんですか？いつもは治療に出かけているのに……？」

改めて自分の周りをごちゃごちゃしていることに気付き、たくさんの本や書類が散乱した机を平助は片付け始めた。夜美も少し手伝う。

「今日は休みをもらったんだ。負傷者もないから家でゆっくりしようと思ってね」
散らばっていた本は難しい医学書ばかりでとてもゆっくりしているようには見えなかった。机の上を綺麗に

しているとそこには風呂敷に包まれた弁当箱が置かれていた。夜美は見覚えのある風呂敷を持ち上げた。重さがそこそこある。どうやら中身が入っているようだ。

「……平助お父様、これって永遠兄様のお弁当箱——。」

そう言つて夜美が風呂敷を見せると平助は顔に手を当て深いため息をついた。

「……またやってしまった。最近作つたはいいものの永遠に弁当を渡しそびれてしまうことが多くなつてしまつた。……確か永遠は今日稽古つけをしようと書いていたな……。届けに行こう。夜美も一緒に行こうか！」

平助に連れられて夜美も永遠の稽古場へと向かつた。

青年隊本拠地にて。

今ではこの国の平和のために欠かせない存在となつてきている王国騎士団といわばその見習いである青年隊。本拠地を北に構え、大きな基地には訓練場などの様々な施設が揃つていた。

軍医をしている平助や青年隊のリーダーである永遠達はよくこの本部を訪れるらしい。夜美はここに一度も来たこともなければこの土地に足を踏み入れたこともない。初めて訪れた場所に夜美はただ黙つて平助について行くだけだつた。

「……ついたよ。」

平助がひとつの扉の前に立つた。物と物がぶつかり合う凄まじい音がかすかに聞こえてくる。平助がドアを開けた。ドアの向こうは木に囲まれた箱庭のような場所だつた。

遠くで永遠ともう二人の人物が木刀を振っていた。三人はただ木刀を振っているわけではなく二人が永遠に襲い掛かっているようだった。二人が付きつけてくる木刀を永遠はいつもと変わらない涼しげな表情で軽々と

かわす。ぐるりと体制を切り替えると永遠はすばやく反撃を繰り出した。目にもとまらぬ速さに二人呆あっけ気にとられ一瞬のすきを生み出したのが命取りだった、永遠の木刀は二人の手首をつき、手からすると木刀が落ちた。

「……すごい！」

夜美は普段は目にしない兄の動きに驚いた。

「永遠！！！」

平助の呼びかける声に永遠が振り返り平助のもとへ駆け寄った。

「父さん、それに夜美まで……どうしてここに？」

永遠に平助はお弁当の入った風呂敷を渡した。

「はい！これ、今朝永遠に渡すのを忘れてたから……。午後も頑張つて！」

平助から弁当を受け取った永遠は、はいと少し笑って返事をすると思いで待たせている二人のもとへ戻っていった。

「……さあ、無事に永遠に渡すことができたし、帰ろうか夜美」

「はい。あつ……永遠兄様！頑張つてください！！！」

夜美の声に永遠は振り返り返事をするように手を振った。出ていこうとする平助の後を追って夜美も訓練場を出ようとした。

「……如月さん！？」

夜美がドアに手をかけたその時、永遠ではない別の人の声が彼女を呼び止めた、振り返るとそこには祐真が軽く息を切らしながら駆けつけてきた。

「……本当だ、祐真って人見つけるの得意なんだな。」

後からゆっくりとレオンが追いかけてきた

「……二人ともここで何してるの？」

「何って……俺たちは永遠さんに稽古つけてもらいに来たんだよ」

「じゃあ二人は顔見知りだったの？」

「いや、僕もレオンくんも会ったのは今日のホームルームが初めてだったし、僕たちも稽古が始まったときは驚いたんだよ！」

「……まさかこんなところで祐真に合うとは思わなかったな。俺たちはもともと別々に永遠さんから稽古をつけてもらっていたみたいだからからな」

「そうだったんだね！なんか稽古中に邪魔したみたいでごめんね……。じゃあ、私もう行くね！！」

夜美が出ていくところを二人は見送ると、無言で弁当を食べる永遠のもとへと戻る。

二人も横に座って弁当を広げる、

「……レオンと祐真は夜美のこと知っていたのか？」

ふと永遠が顔を上げて言った。

「え、あつ、知っているというか……」

「今日のクラス替えて俺たち席が近かったので、少し話したくらいです。」

二人がそう言うのと永遠はそうか、と言って少し黙ると淡々と話し始めた。

「……夜美が俺たち家族以外の人と話しているの初めて見た。……とてもまじめでいいやつだから、どうか妹とこれからも仲良くしてやってくれ。」

二人ははい、と返事をして残っていた昼飯をすべて口の中に運び、飲み込むと午後の稽古に励んだ。

翌日学園にて。

夜美が教室に入ったころにはレオンと祐真は席についていた。

「おつ、夜美か、おはよう！」

「如月さん、お、おはよう……！」

昨日とは違ってとても親しい朝の挨拶をしてくれた二人に夜美も笑顔で挨拶を返した。

「おはよう！レオンくん、裕真くん！」

しかし、それからというものの、新学期二日目にしてのいきなりでハードな授業。再び会話ができたのはお昼休みのことだった。束の間つかのひと時に三人は屋上で温かい春風を肌で感じながら弁当を食べた。

「……そういえば、夜美ってお兄さんいたんだな。驚いたよ」

静かな空気を変えるようにレオンは昨日のことを思い出した。

「あれ？でも、永遠さんの苗字って葉月だよね？如月さんと違うけど……」

裕真は何げなく聞いたであろう言葉にレオンは少しだけ気まづい顔をして夜美を見た。

「私と永遠兄様はもともと施設にいて、平助お父様に引き取られたの」

夜美の話聞いた祐真は自分の出した質問とレオンのさっきまでの表情の意味がようやくわかり、なんて軽率なことを言ったしまったのだろうと後悔した。

「……ごめん、如月さん」

夜美は気にしないでと笑顔で返した

昼食を済ませ、午後の授業が終わるころには清々すがすがしい青空も夕日のにじむ茜空あかねへと変わっていた。朝いちば

ん最初に挨拶をしてくれた二人に対して今度は夜美から一緒に帰ろうと声をかけた。二人もありがとうと言ってそれぞれが帰るしたくを始めた。

「そういえば、レオンくんも祐真くんも青年隊に入ってたんだね！」

夜美の言葉に二人の手が止まり、えつ、と声が漏れた。

「いや……あれは……なんというか——。」

「俺たちはまだ青年隊に入っていない。もうすぐ入隊試験だから特別に永遠さんに稽古つけてもらったんだ。俺たちは入隊試験に一度落ちた身だからな」

言いよどむ祐真を遮ってレオンは淡々と話した。

「ちよつとレオンくん！？なんでしゃべっちゃうの！」

慌てる祐真に対してレオンは涼しい顔をしている。

「別に言ってもいいんじゃないか？夜美は永遠さんの妹なんだし」

「……そういうものなのかな？」

正直な所話題についていけていなかった夜美だが、空気を読むことにした。

「う、うん。内緒にするよ！だ、誰にも言わないから……！！」

頷く夜美に祐真は安堵あんどの表情を見せた。

「本当！？よかった……」

「まあ、青年隊に入隊していない人が青年隊の人に指導してもらうなんてこと普通はあり得ないからな。俺も夜美じゃなかったらいつてなかった」

レオンの話を聞いて夜美も何とか理解する事が出来た。

「……ねえ、もう帰ろう？下校時刻になっちゃうよ？」

夜美が気を取り直すように話を切り上げた。

「そ、それもそうだな！ひとまず帰ろう」

レオンもそれに便乗して三人は足早に教室を後にした。

「今日はいろいろありがとね！クラスメイトとこんな話したことなんてないよ！……私は結構楽しかったな
〜！」

そう言つて笑顔を見せる夜美にレオンと祐真は昨日の永遠の言葉を思い出した。

「如月さん……僕もだよ！僕も普段なら教室で本を読んだのに、誰かに話かけるなんて久しぶりだな。」

「俺も、あまり人とかかわるの苦手なだけ……昨日の出来事と言ひ俺たちは何か縁でもあるのかもしれないな。」

そうかもしれないね、と夜美は笑つた、それにつられて二人も微笑ほほえんだ。

「……そういえば、どうしてレオンちゃんと祐真くんは青年隊に入隊しようとしてるの？」

靴箱についたとき夜美の問いかけた。ふと二人の手が止まる。

「えっと、……実はね——」

祐真が何かを言いながら靴を取り出したその時、何かが吹き飛ぶ音がした。

「なんだ！？」

三人は無意識のうちに音のする方へ走り出した。廊下を右に曲がると廊下には真っ黒になった雑巾が無造作にちりばめられていた。

「なにこれ……」

レオンが雑巾の一枚を拾つた

「……さすが付いてる、それにこれを見ろ」

レオンが手招きをして二人を近くに呼んだ、レオンが指を指した方向にはいつもなら雑巾がかかっているはずの雑巾かけがなく、周りの壁が雑巾と同じように黒いすすが円形状についていた。

「この形は——」

「誰かいるのか!？」

三人の背後で大きな声が出た、振り返ってみるとそこには一人の男子学生が息を切らしながら立っていた。

「その肩にかけた腕章は、生徒会!？しかも生徒会長じゃありませんか?」

祐真の言葉に生徒会長はいかにも、と返事をした。

「不振な音を聞いてここまで駆けつけたんだ!やってくればこのありさま……君たちだったのか!!!」

「……えっ!？」

指を指された三人は固まった

「とぼけても無駄だ!最近学園を爆破するという犯行声明を生徒会に送り付けている自称『爆弾魔』だろ!？手紙にも今日予行をすると言っていたが——」

「ちよつと待ってください!！どうして僕たちが疑われるんですか!？」

我に返った祐真がとっさに話を止める。

「どうもこうも決まっているだろう!君たちがここにいるからだ!どうせうまくいったか確認するためにもどってきたんだろう?」

ビシッと指を指していかにも名推理と言わんばかりの表情見せる生徒会長を軽く受け流すかのようにレオンは生徒会長に少しだけ近づいた。

「……俺たちは爆弾魔ではありません。根拠だってあります。……まず、俺たちが爆弾魔だったら生徒会長がきた時点で顔を見せずに逃げていますよ、さっき今日が予行日と言っていましたよね?ならなおさらです。予

行の時点で生徒会につかまったら元も子もないですから……まあ、第一に予行日といえども爆弾魔は顔を出さないと思いますよ？爆破するだけしといて後片付けも生徒会に任せるつもりでしょうから。」

誰にも話す余地をあたえないほど淡々と早口気味に話した、それを聞いた生徒会長は手を顎に置き考え始めた。

「……確かに、君の推理の方が筋があっている。どうやら自分の間違いだったようだな。……疑ってすまなかつた!!!」

そう言って生徒会長は礼儀正しくお辞儀をした。

「いえ、俺たちの疑惑が晴れたのならそれでいいです」

レオンはそう言って二人を連れて足早に帰ろうとしたが生徒会長に引き止められた

「待ってくれ!……実は、その、さっき爆弾魔の事はほかの者には言わないでほしい!!!」

どうしてですか?と祐真が聞いた。

「このことはできるだけ隠密おんみつに、生徒会だけで解決しようと思つてな。……新学期が始まってまだ間もない。入学したてで学園の事をわかりきっていない新入生だっている。だから生徒たちに不安を与えるわけにはいかないんだ!」

「……そうだったんですね!わかりました!!僕たちは誰にも言いませんよ!」

頼もしそうな祐真を見てつられて返事をした夜美だがその反面、隠し事の多い日だと思つた。

下校時刻を少しだけ過ぎた時間に三人は校門を後にした。

「友達ができたと思えばいきなり爆弾魔扱い……。新学期早々忙しいな」

ため息交じりに放ったレオンの言葉にそうだね、と夜美と祐真は覇気のない声で返事をした

「犯人扱いされたときはどうなるかと思っただけど、レオンくんのおかげで助かったよ！」

さつきまでの事を思い出しながら夜美は言った。

「うん！あの時は僕も如月さんも呆気にとられていて何もできなかった。疑いが晴れたのもレオンくんのおかげだよ！レオンくんは賢いんだね！！」

そんなことない、というレオンに二人はまた改めてありがとう、とお礼を言った。

「……そういえばさ、なんで祐真は青年隊に入隊しようとしてるんだ？」

何の前触れもなく唐突にレオンが祐真に聞いた。

「えっ……なんでっ……」

「それ、私も聞きたい！」

夜美も興味深そうに祐真の顔をのぞいた。

「……少し長くなるんだけど……」

二人は真剣なまなざしを繰り返す。

「……僕には兄さんがいたんだ。僕と兄さんはおじいちゃんから薙刀なぎなたを教わっていて、兄さんはとても強かったんだ。その上とても頭がよかったからその腕を騎士団に買われて若くして王女様の側近にいたんだ——」

「王女様って、行方不明になってるフィアンティーヌ王女様！？」

夜美に答えるようにうなずくと祐真は話をつづけた

「でも、王国の境界がなくなっただけじゃなくて王女様がいなくなっちゃって……。兄さんは王女様の事を守れなかったことを悔やんで必死に探していたけど、攻めてきた魔物に襲われたときにできた傷が悪化して死んでしまっ……だから僕は青年隊に入隊して兄さんの代わりに王女様を見つけ出したいんだ！！これが

僕が青年隊に入りたい理由だよ」

三人の中に重々しい空気が漂った。

「そんなに深く受け止めないで……。じゃあ、僕の家すぐそこだから、また明日ね」
そう言って祐真は曲がり角を曲がって消えて行った。

そのあとは特に何事もなくそれぞれの家へと帰っていった。

……レオンと祐真が青年隊に入隊しようとしている事。爆弾魔が学園にいる事。祐真が青年隊に入隊したい理由。

さまざまな話が今日一日夜美の耳に入ってきた。忙しかった半面、学校がこんなに楽しいと感じたのはいつだったろうと改めて考えさせられた。

「明日はどんなことが起こるんだろう……。楽しみだな……。！」
そう言って夜空の満月を眺めながら夜美は眠りについた。

To Be Continue ……

◆読者のみなさんへ

少女 「ここまで読んでいただき、ありがとうございます！」

少年 「おい！待て、待て！なんでこの作品にまだ登場していないオレ達があとがきにいるんだよ！」

少女 「……本当はこの『櫻』に登場する予定だったんだけど、作者の書くスピードがあまりにも遅いから、未登場 という状態でのあとがきになってしまったんだよ！」

少年 「あとがきで作品に登場するキャラを喋らせたいという作者の思いで、最初からオレたちを出そうと
していたのは知ってたけどよ、別に無理して出さなくてもレオンとかに任せればよかったんじゃないの
か？」

少女 「レオンたちだと、3人ってきりがわるいから」だって、まあ、いいんじゃないかな？それとも
やだった？」

少年 「勝手にオレの名前を出すな！！」

少女 「も勝手に名前言ってるじゃん！！……」てまあ、このことはおいておいて……」

少年 「詳しいあとがきはオレたちが作品に出てるから話そうと思うぞ！！」

少女 「たぶん、すぐに出てくると思うから！楽しみに待ってくれるとありがたいです！！」

少年 「じゃあ、今回はこの辺で！！ありがとうございました！」

卒業生特別寄稿

マナさんは、文芸同好会のOGです。

『櫻』の古くからの読者のかたなら、あの、詩、「404」の「黒い鳥」の切迫を、小説「二つの缶詰」の愛らしさと孤独とを、覚えてくださっているのではないのでしょうか。

彼女は変わらずに、ここにいました。

◇マナさんの個人作品 受賞歴

第二十四回広島県高等学校文芸コンクール 2012年

☆詩部門 優秀賞（広島県代表） 作品名・404

☆小説部門 佳作 作品名・二つの缶詰

とても幼稚な

何をしてはダメなのか

未だにちよつと分かりません

先生質問です

大人って一体なんですか？

大人って偉いものですか？

とあるお坊さんは

優しい声でいいました

無駄な殺生はやってはいけませんと

聞き飽きたその言葉

疑問に思うことないですか

無駄な殺生って一体どんなものですか

良い殺生ってこの世に存在しますか

例えをだしましょう

外国から来たからと

在来種を脅かすと

外来種を駆除することは

良い殺生なんですか

それはつまり外来種の命は

価値『ゼロ』ってことですか

そこらのゴミと同じということですか

答えは分かりません

知りたくもありません

ただ一つ思うこと

人間のせいと息巻く大人達

それを鵜呑みする子ども達

少し怖いと思いませんか

子どもって何ですか？

大人って一体何ですか？

先生質問です

境界線はどこですか？

闘う日々

小さい時は何もかもが思い通りで
どうにも出来ないものなんて無いと思っていた

今ではそれを

若い考えだと笑い飛ばす

それでも本当は羨ましくて
眩まぶしいんだ

進むのが怖くなった

何かをするのが怖くなった

昔はなにも恐れず新しいことが出来たのに

限界を知った今

言い訳ばかりが頭に浮かぶ

いつの時代も人は闘ってばかりだ

ただ相手が違うだけ
どんなに戻りたくても
昔のように無敵になれない
それでも進まなきやいけないのならば

さあ始めよう

限界を見据えて

仕事と闘う

明日も

明後日も

何年も

まやかし堂

マナ

『死ぬ』という言葉はしばしば、永遠の眠りにつくという言い方をする。眠った時に見るのは無限大な広がりを見せる夢。つまりこの世の中とは無限大な夢を見続ける前のつまらない前座に過ぎないのだ。

カランカラン。お店のベルが鳴った。時計はもう午前二時をまわっていた。どうやらこんな早くにお客さんのようだ。

「いらっしやい」

横目でちらっと見やるとそこには五歳くらいの女の子が立っていた。

「おじさん、ここどこ？」

「おや、迷子かな？」

様子がおかしい。そう思って一歩近づくと、その子はびくつと身をすくわせた。別に私は怪しい者じゃないのに。怖がらせないように精一杯の笑顔作った。

「ここは『まやかし堂』だよ」

「まやかし……どう？」

「そう。売ってるモノは無限大な、一生続く夢だよ」

「どういうこと？」

私は一呼吸おいた。

「この世の中はなにもない。そう思わないかい？」

「そつそんなことないよ！お母さんもお父さんもいるし、だいちゃんとかひなちゃんとか！たくさん」

「でもね、そんなの夢に比べたら全然足りないよ。夢にもその人達たちはある。現実にはない魔法だつてある。夢には現実みたいな限界は存在しないからね、なんでもありなんだ」

その子は頭の上にはてなマークが浮かんでいそうな顔をしていた。

「君にはちよつと難しかったかな？」

私はポケットのの中から一つの直径三センチほどの真つ赤な玉を差し出した。

「コレ、知ってる！！ガムでしょ？」

女の子は嬉しうれそうにそれを手に取った。たしかにガムに見えるかもしれない。

「残念。これは『夢玉』だよ。大変なことになっちゃうから食べたらだめだよ。ほら、覗のぞいてごらん？」

女の子は言われたとおり覗のぞいた。

「なにこれ！！おもしろーい」

「それは私のとつておきのコレクションの一つだからね」

その夢について説明したけど、女の子は全く聞いていなかった。数十分後、彼女は満面の笑みで私に夢玉を返した。

「はい、おじさん。すごく楽しかったよ」

「それは良かった」

女の子から夢玉を受け取る。本当に面白かったんだろう。まだ笑っている。

「ほら、夢は楽しいだろ？現実なんかとは全然違う」

「うん、楽しかった。でも、今とそんなに変わらなかったよ？」

「何だって？」

「だって、今も、夢の中も起きている出来事は全然違うのに、どっちも同じくらいなのしいしおもしろいもん」
彼女がそう言った瞬間、ポケットの中から一つの夢玉が転がり落ちた。色は真つ黒。あれは……。私がそれを拾おうと動く前に白くて細い腕がそれを拾った。彼女だ。どくん、と心臓が跳ねた。拾った後、彼女は当たり前であるかのようにそれを覗き込もうと顔の前に持つて行った。

「それは駄目だ」

気づいたら私は彼女の腕を強く掴んでいた。彼女は驚いて真つ黒な夢玉を落としてしまった。静かに落ちたそれは音をたてて粉々に割れた。まずいことになった。でももう遅い。店の中が真つ黒に染まっていく。

「わあ〜」

女の子がそう声を上げた時にはもう店の面影などなかった。広がっているのはかつて私が描いたモノの断片。人々に夢を与えたいと思いつながら夢見た物語。その結末が人々に永遠の夢を売りさばくようになっていく。誰が思っただろうか。

「……っ」

あの時は仕方がなかったんだ。ただ逃げるしか出来なかった。あの頃のように純粹に人の為ためになりたくなんて今では思っちゃいない。でも、あの頃の気持ちを閉じこめることは出来なかった。

「おじさん、いい子。だから泣かないで」

頭の上に少し重い感触があった。女の子がなでてくれているのだと後から気が付いた。そして自分が泣いているということにも。

「まだ、私にも涙というものが残っていたなんて……」

どういふ感情で流している涙なのか見当もつかない。だが、濡れた頬の暖かさが妙に気持ちよかった。

「これはおじさんの夢？」

「……そうだったものだ」

私がそう言うと、彼女は笑ってこう言った。

「暖かいのに、何故か寂しいね。不思議」

でも、嫌いじゃない。そう続けた時、女の子の体が宙に浮いた。時計の針はもう朝の四時になっている。

「そうか、君はもう帰らないといけないね」

私がそう言うと、彼女は不安そうに首を傾げた。

「おじさん、私、どうなっちゃうの？」

「ただの現実に戻るだけだよ。君は迷子だったんだ。ここに来るのは本当は死んでる人じゃないといけない。でも、君は生死を彷徨っている途中みたいだった」

だから半透明の体をしていた。だから夢玉を食べさせる訳にはいかなかった。

「神様は、君をまだ生かすことに決めたらしい。早く戻らないと死んでしまうよ」

「じゃあおじさんは死んでるの？」

そう聞かれて、私の思考は停止した。私が死んでいるか、だって？

「私は夢の住人だよ。生きているとも、死んでいるともどっちつかずだ」

私がその声を絞り出して、天井を見上げた時にはもう、彼女はいなかった。

その何日か後、まやかし堂は跡形もなく無くなった。とある古い病院で何十年も植物状態だった男の人が目を覚まし、ニュースにとりあげられたのはまた別のお話。

小さな世界にさよならを

マナ

水たまりに雨によって落とされた花びらが浮かぶ。名前も分からない花。きっと晴れた日に見たら綺麗きれいなんだろうな。まあ、晴れた日に外に出ることを許されない僕には関係ないけど。

空は電灯によって照らされた白い花を今にも吸い込みそうなほど真つ暗で、まるで底の見えない大きな落とし穴のように思えた。本当に落とし穴ならいいのに。そう思いながら手を空に向かって伸ばした。でも、どんなに手を伸ばしてもそれは僕を吸い込んではいくれない。

「……残念」

当たり前だと分かっているのに、つい口からそんな言葉が出てしまった。

「何が残念なんだ？」

「えっ!？」

後ろを振り返ると17、8歳くらいの男の人が立っていた。お兄さんの髪は真つ赤で、クレヨンで塗りつぶした太陽を思い出した。

「だ、誰？」

人がいるはずがない。もう遅いし、だってこんな酷ひどい雨の中だよ？でも、そんな細かいことはすぐにどうでも良くなった。

「死に伸さん？」

「ん？あくこれか」

彼は後ろに担いでいたものを前にさし出して聞いてきた。僕は何度も首を縦に振る。それは僕の身長と同じくらいの大きな大きな鎌。まるで本の中の死神が目の前に現れたような気分になる。

「残念ながら死に神じゃない」

「……そっか」

死に神さんなら僕を殺してくれたのに。

「死にたいのか？」

「分かんない」

生きていても嬉しいことは何もない。死んだら。行くのは天国？それとも地獄？本当はそんな場所なんて無くて、ただ土の中で朽ちていくだけかも。でも、そのどれもが今の生活よりも何倍も素敵に思えてならない。これを死にたいと言うのだろうか。そう考えて首を傾げた時、首にひやりと冷たいものがあたった。鉄の臭いが鼻を覆う。

「お兄さん、僕のこと、殺してくれるの？」

「……怖がらないんだな」

彼は、鎌を僕の首に当てたままつまらなそうにそう言った。髪と同じ色の目が真っ直ぐ僕を見つめる。

「怖がる訳ない。それとも、怖がって見せた方が良かった？」

「いたずらっぽく笑うと、呆れたようにため息をつかれた。」

「……もう一度聞くからちゃんと答えて。死にたいの？」

「分からないんだ。そう、分からない」

そう言って僕は上着を脱いだ。汚い肌。毎日、毎日殴られて、蹴られて、痣だらけの可愛そうな肌。

「僕の父さんと母さんは駆け落ちみたいな形で結婚したんだって。で、二人とも死んじゃったらしいんだ。僕は母さんの妹さんの家に引き取られたんだけど、その人、おかしくなっちゃって。僕のせいなんだ。僕は望まれない、生まれてきてはいけない子だったから。優しくて弱い叔母さんは他の親戚に文句言われて、村の人たちにも憐みの目で見られて……。僕が悪いから、殴られたり、蹴られたりするのには仕方がないんだけど」

でもね、叔母さんを巻き込むのは違うよね？だから、きつと僕が死んだらみんな幸せなんだ。

お兄さんは静かに聞いてくれた。そして僕が話し終わると、大きな鎌を振り上げた。ああ、死ぬんだ。そう思った。死ぬ。本当は怖い。痛いのも嫌いだし、どういふものなのか分からないから。体が震えないように気をつけて、目を瞑って覚悟した。でも、いつまでたつても何も起きない。不思議に思うと、急に体が暖かくなった。死ぬ瞬間ってこんなにも暖かくなるんだなあとぼんやりと考えていた。でも、痛みもないし、手も足も動かせる。

「えっ？」

おかしいなと思つて目を開けると、お兄さんに抱きしめられていた。

「ちよつ、やめてよ」

僕がもがくと二回僕の頭をぼんぼんと優しく叩いて離れてくれた。少し温かくなった体温を一気に雨が奪っていく。

「一人でずつと頑張つてたんだな」

そう言われて、何故か涙が出た。ありふれた、普通の言葉。でも、その言葉で僕の中の一部が救われた気がした。

「俺についてくるか？」

唐突にそう言われて、頭が真っ白になった。

「俺についてきてどうなるかは分からない。多分、いや絶対嫌な思いはさせると思う。でも、退屈はさせないし、ここにいるよりは楽しいものを提供できると思うんだが」

「いいの？」

「いいから言ってるんだろ？」

「行く！ついて行きますす！！」

「ただし条件がある。それは——」

僕は今まで感じたことのない気持ちを感じながら家に帰った。そして、自分の部屋でメモを書く。お兄さんから出された条件はちゃんと叔母さんに別れを伝えることだったから。

「えっとお、『叔母さん、僕は昨日知り合ったお兄さんと一緒に旅に出かけることになりました。僕は大丈夫だから、叔母さんも幸せになつてね』と」

あとはこれをテーブルに置けばいい。そう思つてリビングに向かうと、台所で水を飲んでる叔母さんとお会つた。

「……っ」

分かつてる。叔母さんはとても優しい人、だって。分かつてるはずなのに。体がすくんで、上手く息が出来なくなる。

「叔母さん、眠れないの？」

喉から絞り出すように声を出した。叔母さんは眠れないと僕を殴って、その後謝りながら泣きじゃくつて気

絶するように眠る。僕はそれを謝るのは僕の方だと思いつながら眺めることしかできなかった。きっと今日は僕がいなかったから家の中で暴れたんだろう。リビングがまるで泥棒に入られた後みたい。

「どこに行つてたの？」

鋭く刺すような視線を向けられる。

「ごめんなさい。いつもいつも僕のせいで……。だから、この家を出て行くことにしました」

もう大丈夫ですよ。そう続けようとした時、右頬ほおが熱くなった。少しして平手打ちされたことに気づいた。

「この家から出て行く事なんて許さない」

そして、いつものように泣きじゃくりながら謝る。

「ごめん、ごめん叔母さん。もう決めたことなんです」

本当は知っていた。叔母さんが僕を雨の日以外、外に出さず家の仕事をさせるのは、他の親戚や村の人が僕の悪口を言っているのを僕に聞かせないためだ。僕のことを殴ったり蹴ったりするのは誰もが僕を見るとまるで汚いもの、または存在しないかのように扱う中で、僕は汚くない。ちゃんと触れるし、存在していると教えてくれているのだ。優しくて弱い叔母さんの、壊れながら、後悔しながらも『望まれない子』にくれた精一杯の『優しさ』。

「叔母さん、本当に今までありがとう。……ごめんなさい」

泣きじゃくる叔母さんの手を乱暴に振り払って家を出た。それだけが大好きな叔母さんに来ること。僕が出来る精一杯の恩返し。ありがとう、ありがとう。これからはきつと幸せになってね。絶対に振り返らないように一生懸命手足を動かした。振り返つたらきつと僕はもう進むことが出来なくなつただろうから。

「お兄さん、お別れ言ってきたよ」

公園に行くと、お兄さんはすべり台の上に座って星を眺めていた。

「もう、いいのか」

「うん。あれ以上いたら僕はきつと叔母さんを不幸にしちゃう。そして僕も今以上に駄目になっちゃうから」

「じゃあ行くか」

いつの間にか目の前にいたお兄さんが右手を出してくる。

「うん」

僕は迷わずその手を取った。それが例え死に神や悪魔との契約成立の合図だとしてもそうしただろう。そして、今まで僕を守ってくれた優しくして残酷な世界とさよならした。

◇著作者

山陽女学園高等部 文芸同好会

二年生 蒼(部長)

〃 濤音

卒業生 マナ(文芸同好会OG)

◇表紙絵

卒業生 こんびにべんとう(文芸同好会OG)

山陽女学園文芸同好会誌 通算二十八号

櫻

二〇一九 春号

平成三十一年三月十四日 発行

著作・編集・製本

山陽女学園高等部

文芸同好会